

## 第4章

# 「ブラックバーディング」は終わらない

フィジーにおけるソロモン諸島系住民の「階級性」とその表象

関根 久雄

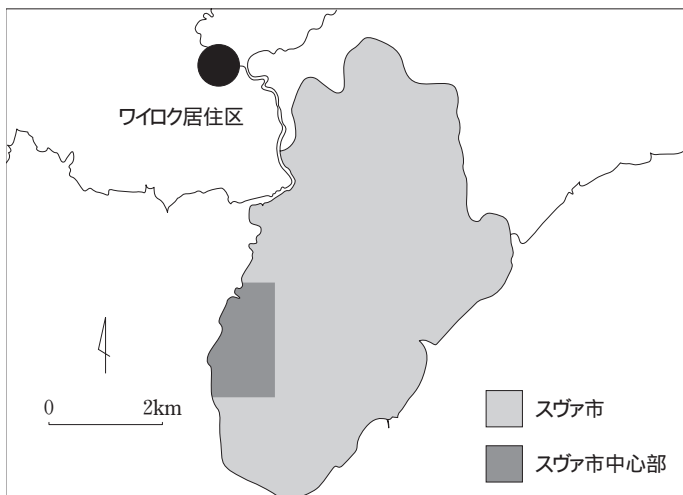
ソロモン諸島よ  
あなたは遠くあなたに浮かんでいる  
あなたの子供たちは今、フィジーで暮らしています  
今でも忘れない  
我々の祖先が連れてこられてきた日のことを  
英国人に騙され、家族に別れも告げずに  
船で連れて来られた日のことを

### はじめに

冒頭に掲げた詩は、フィジー諸島共和国の首都スヴァから北へ約8キロメートルのところにあるソロモン諸島系住民 (Solomonis) の居住区 (ワイロク〈Wailoku Settlement〉, 約1028平方キロメートル, 図1)に住んでいたジェシー・アフ (Jesse Afu) が1985年に作詞作曲した「遠い島から来た者の子供たち」 (“The Children who came from a Faraway Island”)の一部である<sup>(1)</sup>。彼はこの曲を作った2年後の1987年に、ソロモン諸島へ移住した。

フィジー諸島では、1987年と2000年に計3回のクーデターが発生している。

図1 スヴァとワイロク居住区



(出所) 筆者作成。

そのいずれもが、同国におけるインド系住民（移民）の政治的台頭に対するフィジー系住民の抵抗という共通の基本的枠組みをもつ。1987年のときには、大首長会議（The Great Council of Chiefs）<sup>(2)</sup>が、フィジー系住民の「至上権」（paramouncy）を保証する内容に憲法を改正するという条件のもとで、クーデターを支持した（Kaplan [1988: 96]）。また2000年時には、クーデター後に誕生したガラセ暫定首相（当時）が、「フィジー系住民が幸福にならないければ、フィジーに平和も安定もない」（橋本 [2000: 7]）と語ったという。フィジー諸島は、現在までのところ、フィジー系住民の政治的・社会的優位に基づく社会であり、その枠組みを揺さぶることは許されない状況にある。

冒頭で触れたソロモン系住民も、当然その枠組みの中にある。ソロモン系住民は、19世紀後半から20世紀初頭の時期に、農園労働者として渡ってきた人びとの子孫である。そのほとんどがワイロク居住区に暮らす。

これまで、フィジーの太平洋島嶼移民に関する研究は、主に19世紀後半から20世紀前半の移住および定着期に関する歴史学的研究（たとえばMunro

[1990] [1993], Scarr [1967], Shlomowitz [1986] [1987], Siegel [1985], Corris [1973] など) が中心であった。移民の数や、太平洋島嶼地域からの労働者調達行為(「ブラックバーディング」, 次節で詳述)に関する植民地政府<sup>3)</sup>のさまざまな法令や政策などの史料に分析を加えながら、その歴史像を明らかにしようとするものである。しかし、それらは主にブラックバーディングが制度的に終了する1914年前後までを対象としており、出身地に帰らずフィジー社会に留まった移民の「その後」に関する研究は、稀である。とくに、社会学的、人類学的視点から彼らの生活レベルの状況に注目した研究は少なく、クヴァ(Kuva [1974])とハラプア(Halapua [1987] [1993] [2001])の研究にはほぼ限定される。

クヴァは、ソロモン系住民がフィジー社会に定着する歴史的過程を、ワイロク居住区の移民第1世代の老人に直接インタビューしながら再構成するとともに、1970年代における同居住区の実態と社会的問題点の抽出を行った。彼はその中で、ソロモン系住民が土地権をもてず、教育機会に恵まれないことの否定性を強調する。同様の指摘はハラプアにおいてもみられる。ハラプアは1980年代に同居住区を調査し、フィジー社会におけるワイロク住民(ソロモン系住民)の位置づけを試みている。彼らはフィジー社会における近代的、伝統的双方の文脈においてこれまで決して表舞台に登場してこなかった人びとであり、とくにその状況に対し「周縁化」(marginalization)の概念を用いて説明する(Halapua [1993] [2001])。自ら英国国教会のトンガ人司祭であるハラプアは、周縁化の主要因のひとつとして、教会によるソロモン系住民の集住化政策や彼らへの「庇護」を指摘する。

本章では、クヴァやハラプアの先行研究や歴史学的諸研究を踏まえたうえで、フィジー諸島の植民地化以降の歴史的過程において周縁化されたソロモン諸島系住民の現状を、「階級」の視点から考察するものである。

## 第1節 「ブラックバーディング」について

1860年代以降、西太平洋の島じま（ソロモン諸島、ヴァヌアツ、パプアニューギニア島嶼部、キリバスなど）から、延べ約10万人の島民がオーストラリアのクィーンズランド地方、フィジー、ニューカレドニア、サモアにある白人入植者の農園で働くために海を渡った。それは、たいてい3～6年の期限つきで、1911年まで続いた。太平洋島嶼地域から農園労働者を調達する行為を、とくに「ブラックバーディング」(black birding)と呼ぶ。フィジーに初めてメラネシアの島嶼民<sup>(4)</sup>が送り込まれたのは、1865年である。そのとき、180人がヴァヌアツ（当時・ニューヘブリデス諸島）からやってきた（Siegel [1985: 46]）。1911年に同制度が終了するまで、延べ約2万7000人の島嶼民がフィジーを訪れた（表1）。そのうち、ソロモン諸島出身者は8228人（Siegel [1985: 46], Munro [1990: xlvi]）（あるいは9424人〈Corris [1973: 149]〉）であり、ヴァヌアツ出身者に次いで多かった（ただし、1880年代以降は、島嶼地域からくる労働者の多くがソロモン諸島民であった）。

フィジーでは、19世紀前半までは、地元のフィジー人と白人との間で白檀交易が、中国人との間ではナマコ交易が行われていたが、ヴィテイ・レヴ島内の一部地域に限られたものであった。しかも、フィジー人にとってそれら

表1 ブラックバーディングでフィジーにやってきた太平洋島嶼民の人数  
(単位：人)

|           | 1865～69 | 1870～79 | 1880～89 | 1890～99 | 1900～11 | 合計     |
|-----------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|
| ヴァヌアツ     | 1,388   | 8,936   | 3,495   | 223     | 156     | 14,198 |
| ソロモン諸島    | 0       | 1,513   | 4,078   | 829     | 1,808   | 8,228  |
| キリバス      | 271     | 1,330   | 539     | 258     | 0       | 2,398  |
| パプアニューギニア | 0       | 0       | 1,618   | 0       | 0       | 1,618  |
| その他       | 0       | 585     | 0       | 0       | 0       | 585    |
| 合計        | 1,659   | 12,364  | 9,730   | 1,310   | 1,964   | 27,027 |

(出所) Siegel [1985: 46] より筆者作成。

は、当時盛んに行われていた部族間抗争に用いるための銃器を取得することを目的としていた (Derrick [1950: 68])。

1835年にキリスト教メソジスト派教会がフィジーで布教活動を開始し、ヴァカミシナレ (*vakamisinale*) という、教会に対する世帯ごとの負担金支払い制度を導入した。上記の交易活動やこの制度などを通して、徐々に貨幣経済がフィジー社会に導入されるようになった (Halapua [2001: 21])。そして、さらにその社会状況を拡大させたのは、綿花生産である。

1861年にアメリカで南北戦争がはじまり、綿花の生産量が急減し、価格が高騰した。多くの白人入植者がフィジーを訪れ、綿花農園を開設したが、地元のフィジー人は農園における管理された労働に関心を示さず、労働者の確保に苦慮した。フィジー人が欲していたのはあくまでもマスカット銃であり、それさえ確保できれば労働を継続する必要はなかった (Derrick [1953: 168])。それによって入植者たちは、労働力をフィジー以外の地域に求めるようになった。

初期 (概ね1860年代から1870年代頃まで) のブラックバーディングは、事実上「誘拐」もしくは「奴隷狩り」の様相を呈していた。労働者を求めてやってきた白人交易人は、現地の人びとが警戒しながらカヌーで船に近づいてきたところを、甲板から石や鉄製品を落として沈め、彼らを助け上げた後、そのまま船で連れ去るという方法をとった (Fox [1967: 28])。また、はじめに交易人が上陸し、住民にタバコや酒を振る舞ったあと、同様のものが船にあることを告げ、人びとを招待する。そして、乗船した彼らを船倉に導き、そのままハッチを閉めて出航してしまう方法もあった。

1870年にクィーンズランド政府は、そのような行為で労働者を確保する方法を禁じる法律を制定し、島嶼民自身の意志の確認と労働者に対する人道的扱いをチェックする政府の代理人をリクルート船に乗船させることにした (Kuva [1974: 3])。しかし、筆者が1992年に調査したソロモン諸島のチョイスル島ササムンガ地区には、1890年代に同地区の政治リーダー<sup>(5)</sup>が白人リクルーターに連れ去られ、フィジーの農園に送り込まれたという伝承が残って

いた（関根 [1995: 418]）。そのことから、その制度が必ずしも十分に機能していたわけではない当時の状況をうかがい知ることができる。

他方、帰還者が徐々に増えてきた1870年代後半以降、志願して白人のリクルート船に乗り込む若者や、同じ親族集団の若者を船に乗り込ませる長老も出てきた。たとえば、ソロモン諸島サントイザベル島南部にあるブゴトゥ地区では、その地域で大きな名声を得ていたベラという名の政治リーダーが、白人リクルーターとの間で労働者派遣のブローカー的役割を果たしていた。ベラはリクルーターから「仲介手数料」として銃器や鉄製品を入手し、それを部族間抗争や「首狩り襲撃」に用いていたという（Corris [1973: 105], Jackson [1975: 68]）。さらに、一度出身地へ帰った後に、再びブラックバーディングでフィジーやクィーンズランドへ働きに出る者も多くいた。シュロモウィッツによると、1885年から1911年までのすべての島嶼出身労働者（フィジー以外の地域を含む）のうち、29%がブラックバーディング経験者であった（Shlomowitz [1986: 110]）。クヴァが1971年にワイロク居住区でインタビューした移民第1世代の9人は、いずれも1880年代後半に「志願」してフィジーへやってきた人たちである。彼らは、銃器や西洋の物品を手に入れ、ソロモンに持ち帰ることを渡航の目的としていた。このうち2人は、すでにクィーンズランドの農園で働いた経験があり、2度目の渡航であった（Kuva [1974: 8-13]）。

労働契約期間（3～6年）を終えた労働者の多くは、出身の島へ帰還した。コリスによると、1877～1914年の間にフィジーからソロモン諸島へ帰還した人の数は4061人（その期間にフィジーへやってきた人の数は8603人）であった（Corris [1973: 149]）。彼らは、出身地へ帰る際に、銃やナイフ、斧などの鉄製品、鏡や多量の衣服を持ち帰った。

19世紀におけるソロモン諸島は、キリスト教宣教師の布教活動やイギリスによる植民地統治が開始された時期であるが、その前後期には首狩りをともなう激しい部族間抗争が繰り返されていた。そのため、その時期にソロモン諸島に入植するヨーロッパ人は極めて稀であった。しかしそれでも、1830年

代頃からは、不定期にやってくる白人交易人と地元住民との間で、ナマコやタカセガイ、シンジュガイ、コブラなどと、鉄製品やマスケット銃との交換が、散発的ではあるが始まっていた。

当時（あるいは現在においても）のソロモン諸島では、原則として世襲的な政治的権威は存在しておらず、リーダーシップは、財力や戦闘における功績、人びとを納得させる弁舌能力など、他者よりも卓越した能力をその集団のために効果的に発揮することによって獲得された。言い換えると、（男子にほぼ限定されるが）誰もが社会的名声をかちとるチャンスがあり、またそれだけに常に他者との競合的關係を意識しなければならなかった。マスケット銃や衣服などの西洋的物品を獲得する行為は、他者との関係において優位にたつことを可能にしてくれるものであった。

ブラックバーディングでフィジーへ渡った者の多くは、17～22歳ぐらいまでの独身者であり、とくにマライタ島出身者が多かった。彼らにとってブラックバーディングは、直接的には海外の農園における単純労働の機会であったが、同時にそれは、鉄製品や銃器を含む近代的な物品を得るための絶好の機会であり、それを通じてソロモン社会の伝統的文脈における「名声」を克ち獲り、個人の社会的地位を向上させるための手段のひとつとして捉えられていたのである。

## 第2節 ワイロク居住区とソロモン諸島系住民

### 1. 「離農」からワイロク居住区へ

1974年にフィジーを植民地に加えたイギリスは、1971年のハリケーン（台風）で壊滅した綿花に代わる産業としてサトウキビ農園の導入に注目した。ブラックバーディング初期におけるソロモン人労働者も、当初はサトウキビ農園に雇われていたが、彼らの賃金が徐々に上昇するにつれ（1877年には、

彼らの賃金は年間3ポンドから6ポンドへ上昇していた)、初代フィジー総督のアーサー・ゴードン卿(Sir A. Gordon)はより安価で安定的な労働力をイギリス領インドに求める構想を抱きはじめて(Premdas[1992: 106], Halapua[1993: 21])。インド人は5年契約であり(契約終了まで長くなり、それだけ労働者の調達機会が減少する)、家族単位でやってくるので食事面の費用を考慮しなくてすむという、雇用主にとっての利点があった(Shlomowitz [1986: 139-141])。インド人がはじめてフィジーに到着した1879年から1911年までの期間にソロモン諸島を含む太平洋島嶼地域からやってきた人の数は1万4877人で、同時期におけるインド人移民は4万7330人であった(Gillion [1962: 215], Siegel [1985: 46])。ほとんどのインド人は、当時の主力産業になっていたサトウキビ農園に雇用され、ソロモン人などのメラネシア人は除外されていた<sup>6)</sup>。

サトウキビ農園で働けない人びとは、比較的経済力の乏しい入植者が経営していたココヤシ農園で働くか、スヴァヤレヴカ(Levuka)<sup>7)</sup>などの「都市」で賃金労働につくようになった。また同時に、厳しい農園労働よりも比較的楽で安全な都市における賃金労働に魅力を感じ、3年間の労働期限が満期になった後、自ら進んで都市へ出ていく者もいた。都市では、公務員の家の下働きや船の乗組員、橋づくりや墓守り、ワーフでの荷役などの仕事につくことが多かった(Corris [1973: 84])。移民第1世代から第2世代のソロモン系住民のほとんどは、1925年に英国国教会によってメラネシア系住民のための学校が創立されるまで識字力を欠いており、彼らが都市で得られる職業は、そのような単純労働に限定された。

1914年にソロモン諸島出身者などを出身地へ帰還させる最後の船が出航した後、フィジーの英国国教会は、フィジーに留まった者たちに対する活動を活発化させた。英国国教会は、1870年11月に宣教師ウィリアム・フロイド(Rev. William Floyd)がフィジーに在住する白人の要請を受けて活動をはじめたが、すでにその頃のフィジーではメソジスト派がフィジー人に対する宣教活動を行っていた。とりわけザコンバウ<sup>8)</sup>が1854年に同派によって改宗してからは、同派がフィジーにおけるキリスト教布教をほぼ独占していた。フロ



イドにとって、白人以外の宣教対象は、事実上ソロモン諸島やニューヘブリデス諸島からの労働移民だけであった (Corris [1974: 92-93])。そこで同教会は、都市部だけでなくヴィティ・レブ (Viti Levu) 島内24の居住区に分散していたソロモン諸島などのメラネシア地域出身者を、スヴァ近郊のワイロク地区1カ所に集住させる計画をたてた。この集住化は、英国国教会の活動を行ううえでの便宜をはかることと、人びとが直面していた「土地なし」(landless), 「家なし」(homeless), 「職なし」(workless), 「(自分の) 国なし」(stateless), 「真のリーダーシップがない」(without real leaders) 状況を解決することを目的としていた (Halapua [2001: 48])。

しかし、英国国教会によるソロモン人の集住化について、クヴァは、「キリスト教による救済の名において、教会はメラネシア人を救おうとした。メラネシア人に対する教会の過保護な対応が、より広いフィジー社会から彼らを遠ざけることになった」(Kuva [1974: 20]) と指摘し、それが彼らの社会的劣位を決定づける一因になったと述べる。集住化によって、ワイロク居住区がそのまま土地や職などの社会的利益を享受しえない人びとと同義に理解され、フィジー社会から明確に分断されることになってしまったのである。

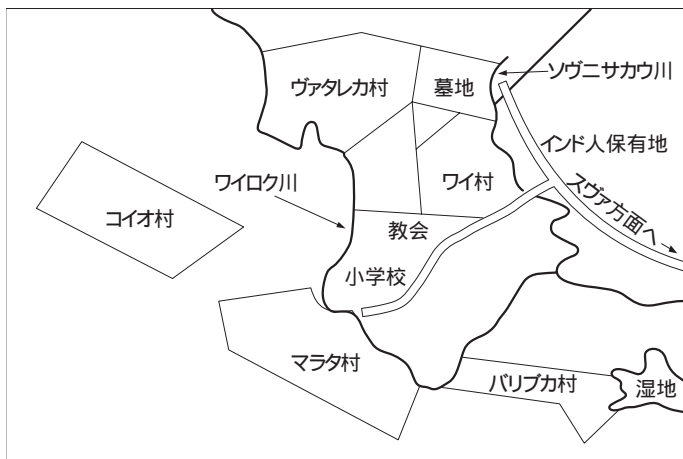
## 2. ワイロク居住区の社会組織<sup>(9)</sup>

ワイロク居住区は、正式には1942年8月に開設されたが、その前年の4月(イースター・マンデー)に、英国国教会の主教 (bishop), 英領フィジー政府土地局 (Lands Department) 局長, そして約80人のソロモン系住民がワイロクに集まり、教会礼拝を行った (Kuva [1974: 17], Halapua [1993: 75])。居住区の土地は、1941年7月に英国国教会の管財人 (trustee) が四つの土地所有集団 (マタンガリ <matagali>)<sup>(10)</sup>から99年間の借地契約を結び、借り受けたものである。現在、婚姻、就労などの事情を抱える人は別にして、フィジーのソロモン系住民がまとまって住んでいるところは、ワイロク居住区だけである。

ワイロクでは、人びとは居住区開設当初から、厳密ではないが、居住区内にソロモン諸島における出身地ごとの「村」を形成している(図2)。それは、マラタ (Marata)、コイオ (Koio)、バリブカ (Balibuka)、ワイ (Wai)、ヴァタレカ (Vataleka) の5村である。「マラタ」はソロモン諸島のマライタ島から、「コイオ」は同島中部にあるクワイオ (コイオ) 地域から、「ヴァタレカ」は同島北部のファタレカ地域の名称から命名されている<sup>(1)</sup>。現在の人口は約1000人で、マラタ村が200~300人(約50家族)で最も規模が大きい。他村も100人以上おり、人口はコイオ村、ワイ村、ヴァタレカ村、バリブカ村の順に多い。

ワイロク居住区には、居住区全体を代表する「チーフ」がいるが、象徴的存在にとどまる。実質的な全体的リーダーは、英国国教会の司祭 (minister) である。チーフの地位は、1909年にソロモン諸島からフィジーへやってきたA氏 (故人、マラタ村) の系による長子相続である。A氏の次のチーフは長男のB氏 (1993年没) で、その人物が亡くなってから現在のC氏 (B氏の長男) がその地位を受け継いでいる。

図2 居住区内の「村」



(出所) Halapua [1993] より筆者作成。

ワイロク居住区におけるリーダーシップの特徴は、各村にフィジー人の村落にみられるトラガ・ニ・コロ (*turaga-ni-koro*) がいることである。その役割は、村全体に関わるすべての活動においてリーダーシップをとることである。その中には、公道から村内までの小道やその周辺の雑草取りのような共同行動や、村内で問題となっている事柄の仲裁も含まれる（ちなみに現在のチーフは、マラタ村の前のトラガ・ニ・コロである。任期途中で前チーフが亡くなり、その地位を継承するためトラガ・ニ・コロの職を辞した）。この地位は18歳以上の成人の総意で選出される。毎年年末になると、その年におけるトラガ・ニ・コロの仕事内容がチェックされ（事務的にではなく、漠然と）、翌年もまたその任に耐えられそうだと判断されれば、再任される。

ワイロクにおけるトラガ・ニ・コロはフィジー人村落におけるそれと制度的には近似しているが、根本的な差異がある。後者はその権威が法的に保証される政府の代理人的存在であるのに対し、前者はワイロクの土地領域を借り受け、管理している英国国教会とソロモン系住民の単なる創造物にすぎない (Kuva [1974: 28], Halapua [2001: 77])。つまり、ワイロクにおけるその地位には、法的根拠も行政の実効力もなく、教会の管財人 (trustee) の管理下に置かれる存在である。

ワイロク居住区内の5人のトラガ・ニ・コロは、特別な事情によって話し合いの必要が生じたときには、居住区内の小学校長と主教をまじえて合議を行う（居住区委員会 (settlement council)、議長は主教）。たとえば、地主のマタンガリに対する土地リース料の支払いなど、5村に共通する重要事項がもち上がったときである。このような場合、居住区内の人びと全体に諮る前に、同委員会において事前協議を行う。

### 3. ワイロク住民の現在

これまでワイロクの人びとは、社会生活を送るうえで、フィジー人の慣習を取り入れてきた。それは、彼らが日常語として使用する言語がフィジー語

である点や、ヤンゴナ (*yangona*) を用いる儀礼 (婚姻, 葬式, 誕生時や訪問客があった時の儀礼など), タンプア (*tabua*) の贈与などにみられる<sup>12)</sup>。ブラックバーディングでフィジーにやってきたソロモン人のほとんどが独身男性であったため, フィジーに残った者は必然的にフィジー人女性と結婚することになった。それによって, その後のソロモン系住民すべてはフィジー人の親族集団と血縁関係をもち, フィジー人の妻やその親族とのコミュニケーション手段としてのフィジー語が一般化していった。現在, ほとんどのワイロク住民は, ソロモン諸島の言語 (たとえば, マライタ島のクワイオ語やアレアレ語など) を話すことができない。現在のワイロク住民の大半は移民第3世代から第5世代であるが, すでに第2世代ぐらいからフィジー語が主流になっていた。筆者がインタビューしたあるマラタ村民 (1969年生) は, 第3世代の若い層に属するが, 彼の祖父 (第1世代) は同世代の親しい間の人と他者に聞かれない話をするときだけソロモン諸島の言語を使い, 日常的にはフィジー語のみであったという。

ハラプアは, それらの事実と外見上の近似性などから, ソロモン系住民が「フィジー人になることをイメージしてきた」(Halapua [2001: 89]) と述べる。彼らがイメージする「フィジー人化」とは, 究極的には「土地を所有する」ことである。彼らは現在, 原則として借地料を彼ら自身で負担しなければならないことになっている。その額は, 1991年までの25年間は年総額268フィジードル (18歳以上の成人男性1人当たり2~3フィジードル, 1フィジードルは約55円) であったが, 1991年7月に事前通知なしに年総額1万9000フィジードル (同・1人当たり約70フィジードル) にはね上がった。ワイロクでは, 住民の約80%は無職 (もしくはパートタイムの臨時雇い) であり, 基本的には居住地内の可耕地で自給自足的な農業を生業としている。その可耕地もマーケットに出すほどの収穫量が見込めるわけではない。たとえば, マラタ村のある男性 (34歳) は, フランス政府系の語学学校でパートタイムの職 (雑務) を得ていた。彼の日給は12フィジードル程度であり, 週3日の出勤日があればよい方で, たいてい週0~1日だけだと語っていた。彼には, フィジー人

の妻との間に子供1人がある。

ワイロクは借地であるため、ワイロクの土地を利用しての経済開発は現実的には望むべくもない。筆者がインタビューしたワイロク住民によると、フィジー人は、彼らとソロモン系住民とは根本的に異なる社会的ステータスのもとにあると考えているという。たとえマーケットへ出荷できる収穫量を可能にする土地面積を借地で得たとしても、おそらくフィジー人は、「そこはソロモン人の土地ではなく、フィジー人のものだ」といって、政府などに圧力をかけ、その状況をつぶしにかかるかと彼らは考える。

学歴、職歴、技術に乏しい彼らがスヴァなどにおける賃金労働の機会を得るのは、現実的に厳しい状況である。親も無職のため学校教育費や通学費を支払う余裕がない場合が多い。フォーム3（中学3年）や4（高校1年）まで行けるのはよい方で<sup>13</sup>、小学校（primary school）でドロップアウトする子供もいる。

また、土地権をもたない彼らが現金収入を得るための事業を始めるのも難しい。フィジーの「貧困」について研究したバーによると、1991年におけるフィジーの貧困ラインを、1世帯当たり週77.18フィジードルとしている。ワイロク住民のそれは、約20フィジードルであり、はるか下に位置している（Barr [1990: 74]）。そのような厳しい経済状況に対して、現在、コミュニティ

表2 ワイロク人口および世帯収入額（1993年）

（単位：人）

|       | 人口<br>(全年齢) | 就労人口(21歳以上) |             |             | 1世帯当たりの<br>週収入額(ドル) |
|-------|-------------|-------------|-------------|-------------|---------------------|
|       |             | 定職          | パート         | 無職          |                     |
| コイオ   | 169         | 12          | 22          | 50          | 20.10               |
| マラタ   | 205         | 11          | 39          | 54          | 17.60               |
| バリブカ  | 89          | 7           | 18          | 27          | 10.00               |
| ワイ    | 165         | 24          | 24          | 24          | 21.77               |
| ヴァタレカ | 124         | 20          | 13          | 31          | 17.13               |
| 計     | 752         | 74 (9.8%)   | 116 (15.4%) | 186 (24.7%) | 86.60               |

(出所) Halapua [1993] より筆者作成。

では、経済的に厳しい状況にある世帯を、村単位で支援する体制づくりを行っている。そのための会議 (*taubeni salusalu*) を、毎週金曜日の夜に行っている。議長はトラガ・ニ・コロである。その会議では、とくに子供の学校教育費に対する支援に重点をおいている。コミュニティレベルで子供に高い教育をつけ、やがて彼らが卒業して良い職（賃金の比較的高い職、安定した職）につけば、逆にコミュニティを経済的に助けてくれるだろうという発想である。働いている者の数が少ないので、コミュニティ全体で助け合いながら生活していかなければならないのが、現状である。

借地料の大幅値上げが通告された翌年、ワイロク居住区はマタンガリに対する支払いを履行できなかった。その時彼らは、「借地料が支払われない場合、土地は所有者へ返還されなければならない」という通告を、国家土地信託局 (National Land Trust Board) から受けた。その状況に対してフィジー政府は、1999年から2009年までの10年間を対象に、ワイロクの借地料の大部分（一部を住民が負担）を肩代わりしている。しかし、その期間が終了した後、再びワイロクのソロモン人はその全額を負担しなければならない。そこで現在、ワイロク居住区のトラガ・ニ・コロたちは、マタンガリに対し、土地を割譲してもらおうということではなく、同じ「フィジー人」としての扱いを希望している。それは、ワイロクのソロモン系住民全体が、その土地を所有するマタンガリの成員として認めってもらうことである。それが実現した場合、そのマタンガリに関係するさまざまな行事や行為義務にも、同じ「フィジー人」として関わることになる。

#### 4. まとめ

ブラックバーディングの時代以来、ソロモン系住民は、農園労働者から都市労働者へと向かう大きな流れの変化があったものの、いずれにしても学歴や技術のない低賃金労働者としての役割をになってきたことに変わりはない。それは、彼らが、移民史においてつねに、フィジー人の対極に位置する社会

的弱者として存在してきたことと深く関係する。皮肉にもその状況は、英国国教会が彼らを社会的に救済する目的でワイロクの地に「囲い込んだ」ことによって助長され、英国国教会＝ソロモン系＝ワイロク住民→「貧困」「土地なしの社会的弱者」「低賃金労働者」という図式あるいはイメージが、集団レベルで固定されてしまった。

一般に南太平洋地域では、伝統的土地権をもたない個人や集団は政治的に自己を主張する立場になく、社会的に低い地位に位置づけられる傾向にある。ソロモン諸島などのメラネシア人やインド人など、フィジーにおける移民の子孫たちがフィジー社会に土地をもたない（もてない）のは、太平洋における移民のいわば「宿命」である。その宿命を変革することがいかに困難であるかは、同国における過去3回のクーデターが如実に物語っている。しかしながら、1970年代にワイロクを調査したクヴァは、ワイロク住民が高等教育や専門的職業訓練を受けることができれば、彼らの社会的地位は改善される可能性があると指摘する（Kuva [1974: 30]）。フィジーにおけるインド人がその好例である。インド人社会は経済的に躍進し、その経済力によって子供たちに十分な教育をつけ、同国内に彼らなりの地歩を着実に築いてきた。あるワイロク住民は、ソロモン系住民の第1世代以来、子供の教育やそのために必要な労働および蓄財に積極的ではなかったと述べる。彼らは、現実的にみて現在のフィジーの社会的枠組みの中でしか生きてゆくことはできない。また、英国国教会の庇護が結果的に否定的なイメージの固定化につながったとしても、一般にソロモン系住民は自らを英国国教会と密接に結びつけて認識し、ソロモン人であることと英国国教会のメンバーであることを同一視するという現実もある。たとえ現状を改善するにしても、フィジー社会において教会の庇護をよりどころにして社会生活を送るという基本的な枠組みの存在を前提にしたうえで行われなければならないのが現実なのである。

### 第3節 失われた系譜をもとめて：「ユダヤ」という言説

ソロモン諸島の首都ホニアラに在住する南洋福音派教会（South Sea Evangelical Church, 以下SSEC）のエリック・マエフォネ（Pastor Eric Maefone）牧師の話によると、5年ほど前から、マライタ島内のとくに北部、中部地域を中心に、「マライタ人はユダヤの子孫である」という話がにわかにならびに広がっているという<sup>14</sup>。エリック自身、1996年に、出身地（中北部クワラアエ地域）の古老に、最初の祖先についての伝説（「カスタムストーリー」）を尋ねたことがある。その時古老は、「マライタ島に最初に上陸した人たちはイスラエルの民である」と明言したという。その古老は、マライタ島民は一つの家族から分かれて島中に広がったこと、その最初の家族が上陸した場所や、その家族がどのように系譜的に分節していったか、それぞれのサブグループが島のどの地域へ向かったかなどを語ってくれたという<sup>15</sup>。その話によると、マライタ島にはじめて上陸したユダヤ人の家族からエリックの子供まで、22世代であった。

これまで、クワラアエ地域にある伝統的聖域のひとつにヘブライ語らしき文字のある石<sup>16</sup>が確認されているとか、数人のマライタ人のDNA鑑定<sup>17</sup>を行うなど、ユダヤとのつながりに強い関心を示すマライタ人によって、その「証明」が試みられてきた。なかでもSSECのマイケル・マエリアウ師（Rev. Michael Maeliau, マライタ島北部地域出身、元ソロモン諸島国議会議員）は、『旧約聖書』の記述からマライタ人とユダヤ人との連続性を証明しようとしている。彼はその一連の試みを、「マライタ・パースペクティブ」（“Malaita Perspectives”）と呼ぶ。そしてマエリアウ師がフィジーを訪れたときに、その話はワイロク居住区の人びとへももたらされた。



### 1. マライタ島とイスラエルとのつながり：「マライタ・パースベクティ ブ」から

『旧約聖書』の「イザヤ書」に、次のような記述がある。「東から猛禽 (bird of prey) を呼びだし、遠い国からわたしの計画に従う者を呼ぶ。わたしは語ったことを必ず実現させ、形つくったことを必ず完成させる」(「イザヤ書」46: 11)<sup>18)</sup>。

マエリアウ師は、この一文について、「英訳された聖書の中には、猛禽 (bird of prey) を飢えた(どん欲な)鳥 (ravenous bird) と書かれていたり、黒い鳥 (black bird) と訳されているものもある。ここでは人間を鳥にたとえて表現されている。その人間とは、遙かかなたの国から神の意志を実行するためにやってくる人である。エルサレムから遙か東方に位置する地とはまさに南太平洋であり、その最果ての地はソロモン諸島(マライタ島)である」と解釈する。さらに彼は、次のようにも述べている<sup>19)</sup>。

ソロモン王の時代、王は僧アビアタル (Abiather) に、出身地のアナトト (Anathoth) へ帰よう命じた。王はアビアタルの代わりにツァドク (Zadok) を最高位の僧に任命した。ソロモン王は多くの外国人の妻をめとり、異教の神々を祀るようになった。神は2度も彼の前に現れ、外国の神を崇拜しないよう忠告したが、王はそれに従わなかった。神への冒瀆によって、神はソロモン王に敵対する集団を起こした。やがて王国は分裂した。混乱の中、ツァドクは息子のツェリア (Zeriah) に祈禱の力を与え、イスラエルを脱出させた。それは紀元前721年のことである。

ツェリアは彼の妻メリタ (Melita) と子供たちを連れてエルサレムをたち、船で地中海に出た。そして、アフリカの東海岸を通り、南アフリカの喜望峰からインド洋へ出た。彼らの旅は3年におよび、やがてマライタ島東部アタア (Ata'a) に到着した。ツァドクはツェリアを祝福し、彼に遙かかなたの地を所有するよう告げた。彼らはさらに旅を続け、フンブ (Funbu,

クワラアエ (Kwara'ae) に到着した。その日は、紀元前718年10月13日であった。

その後ツェリアは4人の子供をもうけ、フンプ (クワラアエ) で死んだ。長男のコレン (Koren) はシアレ (Siale) へ向かい、次男のガド (Gad) はトバイタ (To'obaita) へ向かった。三男のゲルダ (Gerd) はクワラアエ地域のアラサ (Alasa) へ移った。四男 (名前不詳) はエルサレムへ旅だったが、フィジーで船が座礁し、そのままそこに留まった。その子孫は現在のフィジーにおけるラ (Ra) という親族集団である。

マエリアウ師は、「マライタ・パースペクティブ」の中で次のように述べている。「この世界で最も嫌われている人びとはユダヤ人である。同様に、マライタ人はこの国 (ソロモン諸島国) において最も嫌われた人びとである。ガダルカナル州、ウェスタン州、イサベル州などがマライタ人をそれぞれの州から追い出していることが、その何よりの証拠ではないか」<sup>20</sup>。

1998年から続いているソロモン諸島国における民族紛争は、主として首都ホニアラのあるガダルカナル島の人びとと、第二次世界大戦後に雇用や婚姻の機会などを通じてガダルカナル島に住みついた近隣のマライタ島民との間に発生した武力対立である。紛争の初期 (1999年頃) には、一部の武装したガダルカナル人が島内のマライタ人の所有する家屋や畑などの財を破壊しただけでなく、銃を突きつけて島から追い出す事態に立ち至った。その後、財を失ったマライタ人を中心に武装組織が結成され、彼らはクーデターを起こし、当時の政権を転覆させた。ガダルカナル島から約250キロメートル離れたところにあるウェスタン州では、その事態に際し、「州防衛」を目的に州内に住むマライタ人を追放する動きが活発化した (関根 [2002])。

SSECのエリック牧師によると、現在のマライタ人の中には、マライタとユダヤの連続性に関するこの話を強く信じている人が多いという。すでにそれは、マライタ州の中では、中部、北部を中心に共通の話題になっている。彼自身は、「ひとつの歴史の話としては大変興味深い。しかし、たとえDNA鑑定で肯定的な結果が出ても、あるいはそれにまつわる伝説が語り継がれて

いたとしても、『あなたはユダヤ人なのか』というアイデンティティに関わる問いかけをされても、素直には肯定できない」と述べる。また彼は、若者がこういう話を信じると、強いエスノ・ナショナリズムを抱き、そのことを理由にして再び国内の紛争へ発展することも危惧している。エリック自身は、若者に対しては、あくまでも「伝説」（カスタムストーリー）である点を強調している。

## 2. 「ユダヤ」・「マライタ」・「ソロモン系フィジー人」～「さまよえる民」の宿命

さて、マライタ人とユダヤとの系譜的連続性に関する話は、前に述べたマイケル・マエリアウ師を通じてワイロク居住区にも伝わっている<sup>21)</sup>。

マエリアウ師は、マライタ島民はヤコブの7人の息子（トライブ）、ルーベン（Reuben）、シメオン（Simeon）、レヴィ（Levi）、ユダ（Judah）、ゼブルン（Zebulun）、イサカル（Issachar）、ガド（Gad）の子孫であると述べる<sup>22)</sup>。『旧約聖書』の「創世記」（48: 3-19）には、彼ら息子たちの性格についての記述がある。それによると、ルーベンは気位が高く、力が強いが、奔放で長男としての誉れを失った。シメオンとレヴィは似た兄弟で、どちらも気性が激しく、暴力的である。ユダは統治者であり、王の系譜につながる。ゼブルンは海の近くに住む漁撈民で、船を建造し、船乗りでもある。イサカルは怠け者で、海や陸からの富を得られる時だけ働く。やがて苦役の奴隷に身を落とす。ガドは略奪者に襲われるが、それへの報復を行う<sup>23)</sup>。

ワイロク地区マラタ村に住むD氏（現チーフの末弟）は、これらの性格を総合すると、ソロモン人（とりわけマライタ人）の性格的特徴に符合すると述べる。とくにD氏は、イサカルの性格を強調して筆者に説明した。彼によると、フィジーの中でソロモン系住民は、インド系住民と比べ、決して熱心な労働者ではなく、むしろ「怠け者」だということ。それゆえに、インド系は経済的な成功をおさめているのにもかかわらず、ソロモン系は社会の中で厳

しい社会的地位におかれ続けてきた。D氏はそれを、ソロモン系住民（マライタ人）に宿る運命として解釈するのである。

さらに、前に述べたソロモン諸島における民族紛争においてマライタ人がガダルカナル島から追放される事態に至って、ソロモン系フィジー人はその事実を、フィジー社会で「嫌われ続け」（D氏による表現）、最下層に位置づけられている自らの境遇と重ね合わせて捉える。そして彼らは、この文脈においても、「ユダヤ（マライタ）人の宿命」と解釈するのである。

D氏によると、ワイロク地区内でもこの「ユダヤ言説」は知れわたっているが、積極的にその「証明」に関わっているのは、チーフとD氏の2人である。D氏は、マエリアウ師の「マライタ・パースペクティブ」に関わりはじめてから、ブラック・パーディング時代以降のソロモン系住民の系譜を記録しはじめた。そして、それはわずか3～5世代の系譜であるので、すでに完成している。マエリアウ師による旧約聖書の解釈、マライタ島の伝統的聖域にある石に刻印されている（とされる）ヘブライ文字、DNA鑑定の結果などがすべて真実であるとする、はじめてマライタ島へやってきたとされるツェリアから現在のマライタ島民までの系譜が明らかになれば、一応イスラエルとソロモン系フィジー人とが系譜的に連続性をもつことになる。

ワイロクの人びとがこのことに関心をもつ理由は、「自分たちがどこから来たのかを知りたい。イスラエルから遙かかなたにあるフィジーにも、同じさまよえる（嫌われた）トライブがいることをイスラエルの人たちに知らせたい」ということである。事実であることが判明した場合、イスラエルへ「戻る」かどうかは、現実的な計画としては考えていない。現在は自分たちの「真の」アイデンティティを明確にしたいという段階である。

#### 第4節 「フィジーをつくったのは我々である」：賠償請求の計画

前節で述べた「ユダヤ言説」は、フィジー社会の中で歴史的に培われたソロモン系住民の社会的位置づけに対する説明原理として存在するものである。現状を「仮の姿」をとらえ、彼らにとっての「真の」居場所がマライタ島（あるいはソロモン諸島）であり、あるいはイスラエルであると考えているのである。しかし彼らは、イスラエルはさておき、できることならソロモン諸島へ「再移住」したいという希望をもっていないわけではないが、資金的な問題や移住後の生活に対する不透明感などから、それを具体的な現実的課題として考えているわけではない。

ワイロクの人びとは、「ユダヤ言説」のようなフィジー社会からの「逃避的」な発想をもつ一方で、現状の改善をみざす現実的、積極的な姿勢もみせる。そのひとつが、「賠償請求計画」である。

1988年に、ワイロクのソロモン系住民は「メラネシア人コミュニティ開発協会」(Melanesian Community Development Association)を発足させた。当時彼らは、フィジー社会の中で、フィジー系でもインド系でもない「その他」(general people)に分類されており、同協会はフィジー系と同等の社会的地位（とくに、土地権の取得を可能にする状況）を求める運動を起こした（SS, 2 September 1988）。現在、上記のメラネシア人コミュニティ開発協会は「フィジー・メラネシア人協会」(Fiji Melanesian Association)<sup>24</sup>と名称を変え、同様の要求を継続させるとともに、「祖先を無理矢理フィジーに連れてきて厳しい労働をさせた」という「事実」に対して、賠償金を求める動きをみせている。歴史的に、フィジーの道路建設やさまざまな開発に関わったのは、ソロモン系住民であるという発想である。その賠償金でワイロク居住区的生活環境を改善し、各世帯が社会で生きていくために必要な生活力を備えることを目的としている。しかし、現在この計画は賠償金の請求相手を明確にする作

業を続けているところであり、いまだ訴訟を起こす段階にまでは至っていない。イギリス政府を訴訟相手とするのか否か、対象となる白人の氏名の特定など、少しずつ関連作業を進めているところである。この計画のイニシアティブをとったのは、フィジー生まれのソロモン系住民で、教師やフィジーにある南太平洋大学（USP）の学生など、比較的高学歴の者たちである。D氏は、「祖先たちの時代には、ソロモン系住民は何も要求しようとしなかった。そのために、厳しい生活の中におかれてきた。しかし今、われわれは目が覚めたのだ。そして、あの厳しい時代の人的コストはいくらなのかを真剣に知りたがっているのである」と述べる。

D氏によると、ブラックバーディングに関する話は、父親から常に聞かされていたという。その父親自身フィジー生まれであるのでブラックバーディング時代のことを直接知っていたわけではないが、フィジーのソロモン系住民が世代を超えて語り継いでゆくべき話として伝承されている。その話はいいて、「私たちはこの地（フィジー）から生まれ出たわけではない。ここは私たちの国ではない。私たちには自分たちの場所がある。ここに来たくて来たわけではなく、無理やり盗むようにして連れてこられたのだ。白人リクルーターは、ソロモン人が見たこともないような服をみせ、ワインなどを飲ませて、いつの間にか船を出航させてしまったのである」という内容で語られる。

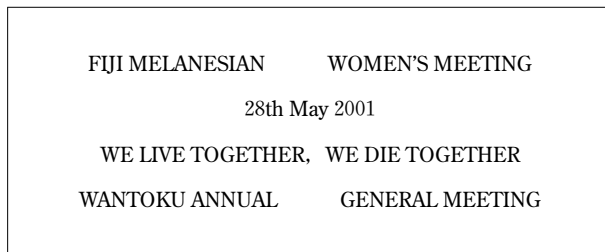
本章の第1, 2節で述べたように、たしかにソロモン人は白人リクルーターたちによって誘拐同然の方法でフィジーに連れてこられた。しかしそのようなやり方は、完全に根絶されたわけではないものの、主に1870～80年代ぐらいまでのことである。実際にサントイザベル島の政治リーダーは労働者調達のプロカー的役割を果たし、多くのソロモン人は自ら進んで渡航を希望していた。また、1914年にフィジーからソロモン諸島へ労働者を送還する最後の船が出航するまでの間に、帰郷する機会がまったくなかったわけでもない。しかし、現在のワイロク住民の話からは、「自ら進んで」という内容の伝承をきくことはないし、帰郷しなかった理由として資金不足をあげる。つまり、「来たくて来たわけではなく、残りたくて残ったわけではない」という語り

である。これは、上記の賠償請求を正当化するための言説として、彼らが現在（あるいは今後）のフィジー社会で生きてゆくうえで不可欠な要素としてある。

現在、彼らは、メラネシア人協会や女性団体（「フィジー・メラネシア人女性会議」〈Fiji Melanesian Women's Meeting〉）の総会など、比較的規模の大きな彼らだけの会議の際に、本章の冒頭で紹介したジェシー・アフの曲をフィジー語で合唱する。その時、ソロモン系住民の多くは悲しい気もちにとられ、涙する者もいるという。

また、女性団体の総会には、とくに「ワントク定例総会」(Wantok Annual General Meeting) という名称を冠している。「ワントク」(wantok) とは、「同郷人」, 「仲間」, 「親友」などを意味するソロモン諸島のピジン・イングリッシュの言葉である。ピジン・イングリッシュは、ブラックバーディング期にオーストラリアのクィーンズランド地方のプランテーションで働くソロモン人などのメラネシア地域出身者が、英語と同地域の言語を混淆させて作り出した言語であり、現在ソロモン諸島では国内の共通語（公用語は英語）として使われている。フィジーのソロモン系住民の中でその言語を話せる者はほとんどいないが、ソロモン（メラネシア）系の人びとの結束を強化する意味から、敢えてその単語を使用している。さらにそのことに関連して、2001年5月28日に開催された女性団体の総会時には記念Tシャツを製作し、胸に大きく“WE LIVE TOGETHER”, “WE DIE TOGETHER” という文字を印

女性団体総会時に着用した記念Tシャツの胸文字



刷して着用した。

これらのことは、親から語り継がれる移住の話やジェシー・アフの歌とともに、現代のソロモン系住民どうしが同じ「強いられた移民の悲劇」を共有する者として再認識する機会をつくり出している。それは言い換えると、ソロモン系住民が、フィジー社会における自分たちの「周縁性」（社会的意味における）を、克服すべき「階級性」（市場的意味における）として明確に自認しはじめていることを意味する。

## 第5節 結論

階級に関する議論は、長くマルクス主義の影響のもとに政治的な概念として解釈され、扱われてきた。すなわち、資本主義体制における階級は、基本的には生産手段を所有するものと、生産手段を所有しないために自らの労働力を売る（生産手段の所有者に搾取される）ものに分かれる。このような資本家と労働者への両極化がやがて相互の対立を通じて階級闘争へと発展するというものである。マルクス主義的な意味における階級には、他の階級に対抗するという共通の目標のもとに動員される集団という意味合いが強調される。ウェーバーも、階級を経済的な所有と非所有の違いに関係して位置づけている点においてはマルクスと共通するが、彼は生産手段だけでなく、教育や技能に由来する優劣に基づく経済的差異を強調していた（Weber [1947: 424-429]）。この二者に源流をもつその後の階級研究においても、基本的には生産手段の所有と非所有の違いが階級分化の基層を成すという点で一致する。そしてさらに、いわゆる資本家としても労働者としても単純化できない階級構造の「中間」に位置する人びとの集団が、より上位の階級に関心をよせるだけでなく、下位に位置する人びとと自らとの資本主義的文脈に直接的、間接的に関わる差異化に注意を傾ける点においても、共通の特徴をもつ（たとえばライト [1986], Parkin [1971]）。いずれにしても、マルクス以来の階級



分析は、基本的には人びとが資本主義的経済活動の枠組みの中に日常的に存在することを前提にして議論されてきた。

フィジーにおけるソロモン諸島系住民は、土地権をもたないだけでなく、一般に賃金労働に就く者も少ない。たとえ就労していても不規則な臨時雇用であり、多くの住民は自給自足的な生業活動に依存せざるをえない状況にある。資本主義的な文脈においては明らかに貧困であり、とりわけ子供の教育やそれとの連続性をもつ雇用の問題、借地料の問題に直面したとき、そのことを強く認識させられてきた。彼らは現実に労働市場における存在としては稀薄であるために、言い換えると、日常的に市場に参加しているとはいえないために「労働者階級」とはみなされず、むしろ「アンダークラス」（「階級外」「最下層」と表現される方が適当であるのかもしれない。しかし、イギリスの階級状況を実証的に研究してきたエジェルは、アンダークラスについてハイスラーが、「アンダークラスは市場において意味のある存在ではないから階級ではない」と述べている点を引用し、従来の階級研究がアンダークラスをその分析対象から排除し、アンダークラスという「階級」を社会の外部に存在するかのように扱ってきた点を批判する（エジェル [2002: 126]）。マルクスが相対的余剰人口あるいは産業予備軍として言及し（マルクス [1967: 789-812]）、ウェーバーが「社会的地位に欠ける人びと」（outcaste）、債務者、貧民と述べた（Weber [1947: 425]）人びとをいわゆるアンダークラスとするならば、マルクスの労働市場要因とウェーバー的な文化的要因双方の劣性に関わる場としてそれをとらえることも可能であろう。エジェルは、アンダークラスが階級構造の一方の極における富の蓄積を支える使い捨て可能な労働力の一部を構成するものであり、「階級外」としてではなく、階級構造の底辺部を占める集合体として見過ごすことはできないと述べる（エジェル [2002: 125-127]）。

土地をもち、政治的優位を堅持するフィジー系と、資本と学歴をもち、経済的・商業的に優位なインド系とは異なり、それらのいずれをももちあわせないソロモン系住民は、ブラックバーディングの時代以来今日に至るま

で、一貫してアンダークラス（「最下層」「階級外」、あるいは「低賃金労働者」「失業者」「その他」という立場に限定されてきた。それは、彼らがフィジー社会において提示しうるほとんど唯一の「階級的」特徴である。

塩田が本書の序章において指摘するように、階級とは分業協業体系において位置と利害を共有している人びとの集団とするならば、エスニシティや共同体などの所与の集団的枠組みは非階級的要因として排除される。その意味において、アンダークラスをその内部的分化を考慮せずに一括してしまうことは、「実態」を反映しないのかもしれない。現実には、ワイロク出身のソロモン諸島系住民の内部にも、実態としての階級的分化（差異化）がないとはいえない。稀少ではあるが、大学を卒業し、教師や、民間企業や商店に勤務する給与所得者は現実に存在している。このような人びとは、春日がフィジー系とインド系との間におけるエスニシティを超越した共通の文化（ライフスタイルや感覚、思考、信条の共有による結びつき）の担い手として提示する都市中産階級（春日 [1991: 164-165]）と同様の特徴を備える新しい人間像となる可能性もある。しかし、そのような内部的な差異化の現実や可能性を見えにくくし、フィジー社会における自らの周縁性をソロモン系住民共通の階級（「アンダークラス」）意識へと転化させているのは、自らを流浪し嫌悪される「ユダヤ人」の運命（宿命）と重ね合わせようとする言説（ユダヤ言説）や「強いられた移民」言説、冒頭で紹介したジェシー・アフの歌やTシャツに記されたピジン・イングリッシュのフレーズなど、ブラックバーディングに絡む「言説の束」である。それらの言説を用いて自分たちワイロク住民の「民族的」アイデンティティに関わる部分を強化し、生活基盤を改善（土地権の取得や高学歴を目指す姿勢など）しようとしているのである。したがってここでは、「ソロモン系」というエスニックな枠組みに基づくフィジー社会における「アンダークラス」を、実態としての階級というよりも、特定の文脈において広義の政治性を帯びる「言説としての階級」という側面を強調して位置づけることにする。

今日、ブラックバーディングは、単なる過去の出来事としてだけワイロク

居住区のソロモン系住民の中にあるのではない。かつて個人や集団の社会的地位や状態を向上させるためにソロモン人自身によっても利用されたブラックバーディングは、現在ではとくに「集団」を強調し、ソロモン系住民に共通する階級意識を導く「言説」にその姿を変えながらも、いまだその役割を終えていないのである。

〔付記〕 本章の内容に関する現地調査は、文部科学省科学研究費補助金基盤研究B(1)「太平洋島嶼部住民の移民経験に関する文化人類学的研究」(研究代表者：清水昭俊・一橋大学大学院教授)の助成を受けて、2001年8月に行った。調査前に、NGOで活動する北口学氏および野平晋作氏にワイロク居住区の事情についてさまざまなご教示をいただいた。また、両氏の紹介で知り得たインド系フィジー人のE氏は、ワイロク居住区の人びとと筆者との橋渡しに時間を割いてくださっただけでなく、フィジーにおける非フィジー系住民の現状についての話も聞かせていただいた。ここにあわせて感謝の意を表する次第である。

〔注〕 \_\_\_\_\_

(1) この曲は6番まであり、歌詞は次のとおりである。なお、日本語訳はNGO「ピースポート」の野平晋作氏による。

1. 遠い島から来た者の子供たち  
ココナッツを育て、道をつくり、  
その他いろいろなことをするために  
フィジーに連れて来られた
2. ソロモン人は今や異邦人じゃない  
フィジーの至るところで  
ソロモン人に会うことが出来る  
けれども忘れてしまった母語と習慣が悲しい
3. ソロモン諸島よ  
あなたは遠くかなたに浮かんでいる  
あなたの子供たちは今、フィジーで暮らしています
4. 1864年  
我々の祖先は無理矢理フィジーに連れて来られた  
アルコールを吞まされ、気を失っているうちに
5. 多くのソロモン人が今、この異なる島、フィジーで暮らしている  
フィジー人は我々のことを異邦人と呼ぶ

我々の祖先はここフィジーで死んだ

6. 我々ソロモン人は忘れられたその者たちの子供たちなのだ

我々はこのフィジーでフィジー人と同等のものは何も得ていない

リフレイン\*今でも忘れない

我々の祖先が連れてこられてきた日のことを

英国人に騙され、家族に別れも告げずに

船で連れて来られた日のことを

- (2) フィジーの伝統的首長層の利益を代表する組織で、1990年に公布された憲法では、この大首長会議が大統領を任命することになっていた。
- (3) フィジーは1874年にイギリスの植民地に編入された。
- (4) ブラックバーディングが行われていた時期のフィジーでは、ヨーロッパ人たちはヴァヌアツやソロモン諸島などのメラネシア地域（南西太平洋）出身者のことを「ポリネシア人」と呼んでいた。
- (5) その後その政治リーダーは労働期限を終え、帰還した。彼は、1905年にはじめてキリスト教宣教師が同地区を訪れたときに、キリスト教の受け入れに大きな役割を果たした。
- (6) 筆者がワイロクで聞いた話の中には、当時のヨーロッパ人がインド人を移民させるようになった理由を、フィジー人との「見分け」をつけるためだったという人もいる。当時、ヨーロッパ人は、見ただけではソロモン人とフィジー人の区別がつかないことがあると、「どっちがフィジー人で、どっちが奴隷(slave、つまりソロモン人)だ？」という訊き方をしたという。
- (7) 19世紀にヨーロッパ人が太平洋交易の中心地として築いた港町で、イギリス人やドイツ人が居住していた。イギリス領になると同時に行政および商業の中心がスヴァに移り、一時の繁栄は影をひそめた。1970年代にマグロ缶詰工場が操業を開始し、工場を中心に町が存立している。
- (8) セル・ザコンバウ(1817?~1882)。1854年にキリスト教に改宗し、その翌年に長年にわたって戦闘状態にあったンレケティとの停戦合意をとりつけた。1856年にンレケティが病死してからは、実質的にザコンバウがフィジーを制覇した。ザコンバウの改宗がフィジーのキリスト教化に大きな影響を与えた(橋本 [1996: 75-92])。
- (9) 本項および次項の内容は、主に筆者が2001年8月に行った現地調査によって得られた内容にもとづく。
- (10) バセボウ(Basevou)、ナイクルクル(Naikurukuru)、ナウルニ(Nauluni)、マテニクル(Matenikuru)。
- (11) 各村は、厳密に出身地ごとに分かれているわけではない。たとえば、マラタ村は、アレアレ出身者の子孫が多数ではあるが、その他にマライタ島トバイタ(To'obaita)地域出身者や同島北部ラウ(Lau)地域、同島中部クワイ

- オ（コイオ）地域およびクワラアエ（Kwara'ae）地域、サントイザベル島、ガダルカナル島出身者の子孫が共住している。
- (12) ただし、通常フィジー人の村落で行われるcai-i-kelekele（高位のチーフなどの訪問客を迎えるときの歓迎儀礼）は行わない。
- (13) フィジー人の場合、スヴァのあるヴィティ・レヴ島内であれば、ほとんどの生徒がフォーム3, 4ぐらいまで進学するという。
- (14) 1979年にマライタ島中部のクワラアエ地区を調査した文化人類学者のバートは、はじめてマライタ島に上陸した人物についての口頭伝承が現地で語り継がれていることを報告している。それによると、その人物はビリティガオ（Bilitigao）という名前で、アジア方面から妻と3人の息子とともにガダルカナル島を経由してやってきたという（Burt [1982: 374]）。また、人類学者のキージンは、クワラアエ地域の人びとが自らの祖先をイスラエルの「さまよえる民」と重ね合わせて認識している点を指摘している（Keesing [1989: 21]）。
- (15) エリックは、その時間いた古老の話を記録し、保存している。
- (16) マエリアウ師はイスラエルへ数回渡航しているが、数年前にイスラエル人をマライタに連れてきたことがある。その時、この石のある伝統聖域に連れてゆき、石に刻まれている文字がヘブライ語であることを確認したという
- (17) マエリアウ師たちは、2001年に、あるマライタの若い女性の血液とユダヤ人の血液からDNA鑑定を行った。同年7月にその結果が判明し、その組成が一致したという。このことは、国内のラジオ局のニュースでも報道された。その鑑定結果をきいたその女性は、「自分はユダヤ人ではなくマライタ人だ」といって号泣したという。
- (18) 本章における『旧約聖書』からの引用文の和訳は、『新共同訳・聖書：旧約聖書続編つき』（ハンディバイブル版、日本聖書教会、2000年）を参照した。
- (19) マエリアウ師が執筆した覚え書き（“Malaita Perspectives”）より引用。
- (20) マエリアウ師が執筆した覚え書き（“Malaita Perspectives”）より引用。
- (21) マエリアウ師自身は、ユダヤとソロモン系フィジー人とのつながりまで直接言及しているわけではない。
- (22) マエリアウ師が執筆した覚え書き（“Malaita Perspectives”）より引用。
- (23) マエリアウ師が執筆した覚え書き（“Malaita Perspectives”）より引用。
- (24) メラネシア人協会は、フィジー政府に登録された団体である。登録によって、同協会は政府から活動資金の支援を受けている。

## 〔参考文献〕

## 〈日本語文献〉

- エジェル, スティーヴン (橋本健二訳) [2002] 『階級とは何か』 青木書店。
- 春日直樹 [1991] 「エスニシティと階級—フィジーの事例から—」 (『奈良大学紀要』 第19号, 161~175ページ)。
- 関根久雄 [1995] 「『ボヴォエ』の復活—ソロモン諸島チョイスル島ササムンガにおけるリーダーシップ—」 (『民族学研究』 第59巻第4号, 415~427ページ)。
- [2002] 「『辺境』の抵抗—ソロモン諸島ガダルカナル島における『民族紛争』が意味するもの—」 (『地域研究論集』 第4巻第1号, 国立民族学博物館地域研究企画交流センター, 63~86ページ)。
- 橋本和也 [1996] 『キリスト教と植民地主義—フィジーにおける多元的世界観—』 人文書院。
- [2000] 「フィジーの2つのクーデター」 (『日本オセアニア学会ニューズレター』 第68号, 1~11ページ)。
- マルクス, カール (向坂逸郎訳) [1967] 『資本論・第1巻』 岩波書店。
- ライト, エリック・O (江川潤訳) [1986] 『階級・危機・国家』 中央大学出版部。

## 〈外国語文献〉

- Barr, K. [1990] *Poverty in Fiji*, Suva: Fiji Forum for Justice, Peace and the Integrity of Creation.
- Burt, B. [1982] “Kastom, Christianity and the First Ancestor of the Kwara’ae of Malaita,” *Mankind*, Vol.13, No.4, pp.374-399.
- Corris, P. [1973] *Passage, Port and Plantation: A History of Solomon Islands Labour Migration 1870-1914*, Melbourne: Melbourne University Press.
- Derrick, R. A. [1950] *A History of Fiji*, Suva: Government Press.
- Dunbabin, T. [1935] *Slavers of the South Seas*, Sydney: Angus and Robertson Limited.
- Fox, C. E. [1967] *The Story of the Solomons*, Sydney: Pacific Publications.
- Gillion, K. L. [1962] *Fiji’s Indian Migrants: a History to the End of Indenture in 1920*, Melbourne: Oxford University Press.
- Halapua, W. [1987] “Matata: Solomonis in Town,” L. Mason and P. Hereniko eds., *In Search of a Home*, Suva: University of the South Pacific, pp.41-55.
- [1993] *A Study of the Evolution of Marginalization: The Case of the Solomon Community of Wailoku in Fiji*, M. A. Thesis, The University of the South

- Pacific.
- [2001] *Living on the Fringe: Melanesians of Fiji*, Suva: Institute of Pacific Studies, The University of the South Pacific.
- Jackson, K. B. [1975] “Head Hunting in the Christianization of Bugotu 1861-1900,” *Journal of Pacific History*, Vol.10, No.1-2, pp.65-78.
- Kaplan, M. [1988] “The Coups in Fiji: Colonial Contradictions and the Post-Colonial Crisis,” *Critique of Anthropology*, Vol. 8, No.3, pp.93-116.
- Keesing, R. M. [1989] “Creating the Past: Custom and Identity in the Contemporary Pacific,” *The Contemporary Pacific*, Vol.1, No.1-2, pp.19-42.
- Kuva, A. [1974] *The Solomons Community in Fiji*, Suva: South Pacific School Sciences Association.
- Munro, D. [1990] “The Origins of Labourer in the South Pacific: Commentary and Statistics,” C. Moore, J. Leckie and D. Munro eds., *Labour in the South Pacific*, Townsville: University of Northern Queensland, pp. xxxix-li.
- [1993] “The Pacific Islands Labour Trade: Approaches, Methodologies, Debates,” *Slavery and Abolition*, Vol.14, No.2, pp.87-108.
- Parkin, F. [1971] *Class Inequality and Political Order: Social Stratification in Capitalist and Communist Societies*, New York: Holt, Rinehart and Winston
- Premdas, R. R. [1992] “Military Intervention in Fiji: Fear of Ethnic Domination,” *Social and Economic Studies*, Vol.41, No.1, pp.103-155.
- Scarr, D. [1967] “Recruits and Recruiters: A Portrait of the Pacific Islands Labour Trade,” *Journal of Pacific History*, Vol.2, pp.5-24.
- Shlomowitz, R. [1986] “The Fiji Labour Trade in Comparative Perspective, 1864-1914,” *Pacific Studies*, Vol.9, No.3, pp.107-152.
- [1987] “Mortality and the Pacific Labour Trade,” *Journal of Pacific History*, Vol.22, No.1, pp.34-55.
- Siegel, J. [1985] “Origins of Pacific Islands Labourers in Fiji,” *Journal of Pacific History*, Vol.20, No.1, pp.42-55.
- Weber, M. [1947] *The Theory of Social and Economic Organization*. New York: The Free Press.
- SS, *Solomon Star*, newspaper published in the Solomon Islands.